「思い出と夢の大学」（抜粋）　鈴木節子

戦後間もない頃の子ども時代

常呂町高齢者教室『平成元年度オホーツク大学文集トーコロ』掲載

（略）子どもの頃は戦争戦争、そして終戦。衣食住はもちろん、生活すべてがないづくしの節約節約で、もちろん白い米のご飯なんて食べられませんでした。来る日も来る日も麦一色のご飯に一汁一菜です。母がせめて学校の弁当だけでもと、わずかに配給されるお米を大事にとって置き、麦だけの鍋の片隅に茶碗１杯だけ入れて炊いてくれるのを４人の子どもが米と麦がほどよく混ざったところを仲良く弁当に持って行くのです。それでも誰１人文句を言う者はいませんでした。お腹がいっぱいであれば良いのです。こういうのはまだ甲の上で、芋やカボチャだけの弁当を持ってくる人だっていたのです。

着る物だって学校へ行く服は大事に大事にして、小さくなっても着れるまで着て、家で着る服は膝小僧も肘小僧もどこもここも継ぎだらけです。冬の長靴もなかなか配給で当たらず、穴が開くたびに自転車のチューブで貼って貼って貼り蓋をして、生地がわからないような靴をはいて転び転び通学したものです。母親の着物も帯もほとんどが子どもたちの服や作業服に替わって、母は暗いランプの下で針を持たない日がなかったでしょう。

私たちが勉強するのも夕食が終わるのを待って、そのテーブルで、頭上からぼんやり灯るランプの下でした。無心で勉強していると、10時頃になると奥から「石油がなくなるから早く寝れ」とどなる父親の声がするのです。進学だって我が家の生活を思う子ども心であきらめるのです。

そんな暮らしの中でも「いろり」のストーブに家族全員が囲み、年寄りも話の輪に入って語り、不自由だらけの生活の中にも家庭の温かさと敬愛がありました。（略）